

その時私が見たものは、まず、壁に貼られた社員食堂のメニューだった。

フライセットときつねそばと、野菜カレー。

本当はかなりおなが減っていた。

どれにしようか、と食堂の入口にあるホワイトボードの前で、私は一瞬考え込んだ。

カレーにしよう、と決めた瞬間偶然にもふと「和歌山のカレー事件」が頭をよぎった。それは確かだ。

あれは独特な私なりの直感の働きだったのだと思う。前日に夜遅くの特集番組で、あの、お祭りの時カレーに砒素を混入した主婦についてたまたま見たばかりだった。そんなふうにせっかく何かを感じたんだから、そこで止めておけばよかった。

でも、その小さな直感くらいでは、流れにどんどん急速に巻き込まれようとしていた私の行動は止められなかったと思う。

あまりそういうふうに考えたことはないけど、その場に私がいたのは必然だったような気がする。いろいろなめぐりあわせで、遠いところにあった糸と糸が偶然ふとつながって、いつの間にかすうっとそこにひきよせられ

てしまった、そんな感じがした。だって、私は何も考えたり、悩んだり、変化を求めたりしていなかったのだから。

ああ、おなかが減ったな、ということくらいしか。

フライも、そばもぴんとこないわ、せめて先週のように鴨南蛮であってくれたらおそばにしたのになあ、と私は思いながら、社員食堂に入っていた。

私が食堂に入るとき、ちょうど出てくるところだった男の人とすれ違い、ちよつとぶつかった。髪の毛がぼさぼさした、どことなく少しうらぶれた感じの、黒い服を着たおじさんで、スーツは着ていなかった。伏し目がちだったし、わずかな瞬間のできごとだったので、それが誰であるかは全然わからなかった。

でも、それは実のところ、同じフロアの隣の編集部で前に働いていた、山添さんという顔見知りの人だったのだ。

私はその人がその人であることに全く気づかなかった。仕事が忙しくて少しお昼の時間がずれ込んでいたので、よくそこで会う総務のアルバイトの光子さんもいなかった。会えばいつでもいっしょにご飯を食べて、たくさん

いろいろおしゃべりをしていた、会社でいちばん仲のいい女の子だった。

社員食堂はいつになく空いていて、午後遅い昼食をゆっくりと食べている人が多かった。テーブルは大体四割くらい埋まっていて、私はほんのちよつと迷った末に「ここでいいかな」と窓ぎわの席に書類を置いた。窓の下には駐車場が見えて、いちようの木から黄色や茶色が混ざったきれいな枯葉が落ちてこんもりとつもっているのが見えた。そして私はおさいふだけ持って、お茶とカレーを取りに行くために立ち上がった。

私はまず最初に食券を買い、カウンターに提出した。顔なじみの白衣のおばさんが「はいはいカレーね」と言っ、満面の笑みでにっこりして奥に入っていた。そして私はお茶の機械のところに行っ、お茶碗にお茶を注いで、またカウンターに戻り、できあがったカレーを受け取った。

その時私はふいに心の中で、ああ、こんなふうにとひとつひとつのことをやっていくのって安らぐなあ、と思っていた。順番にひとつずつ、ゆっくりとだんだんお昼の用意ができてくることの嬉しさよ。そういうちよつとし

た楽しみが、お昼休みのいいところよね、と私は鼻歌を歌いだしそうになりながら、能天気にも思っていた。

今思うと、それから大変なことになる私をかわいそうに思っ、神様がちよつとだけいい気分になさせてくれたのかもさえ思う。

なんだか胸のうちがあつたかくて、まるでこれから楽しいことがあるような感じだったからだ。

実際はそれどころではなかったのだけれど、私はその、能天気で平和だった最後の瞬間思うとなんだかかわいらしくて、くすくすと今でも笑えてくる。

その間、その場で誰一人として私を見ていた人はいなかった。

みんなちようどそのとき自分のことや自分のテーブルでの話題に没頭していて、ただでさえ少なかったその場にいた人たちは、誰もそのことに気づいていなかった。

それから私は席に戻り、もくもくと、書類を見ながらカレーを食べた。

運の悪いことに、私はその前の週にかなりひどい鼻風邪をひいていて、まだのども荒れていた。それから、午後の光が窓から少し暑いくらいに入ってきていて、それ

がまぶしくて多少ぼんやりし、気が散っていた。